ジョン・ウェスレーと民衆的宗教世界

――『アルミニアン・マガジン』誌の雑録の検討を中心にして――

山中　弘

一、問題の所在

一七世紀前半までのイギリスの宗教状況は多様性に溢れていた。[1] 制度的なキリスト教の周辺には、魔女や亡霊や占星術など実に様々で雑多な信念や儀礼が存在し、支配層や知識人たちを含めた多くの人々がそれらに関わっていた。しかしながら、一八世紀にはこうした信仰や儀礼は次第に姿を消してゆき、それに代わって自然科学を中心とした新しい機械論的なコスモロジーが歴史の表舞台に現われてくるようになる。もちろん、古い民衆的信仰はまったく消失したわけではなく、一九世紀になってもイギリスの辺境地域に生き残り、さらに二〇世紀の今日でも制度的なキリスト教世界の周辺に細々とその命脈を保っている。[2] しかし、全体としてみれば間違いなく、一七世紀前半までの民衆的信仰の多くは、忘れ去られたり否定されたりしながら次第に消滅ないし変質を余儀なくされていった。とりわけ、これまでの信仰を支えていた伝統的共同体の崩壊と並んで、一九世紀に本格化する宗教的リバイヴァリズムや福音派の積極的な民衆への布教活動は、従来の民衆的宗教世界に大きな影響を与えた。[3] これらの活動は、一般民衆を制度的なキリスト教会の領域に引き戻すことにある程度成功するとともに、プリミティブ・メソディストたちの抱く伝統的な祭への敵意に象徴されるように、古い信仰への自発的な決別を民衆的世界の内側から生み出したのである。

筆者は、民衆的宗教世界のかかる衰退と変質の転換点として、キース・トーマスが筆をおいた一八世紀を考えている。この時代こそ、古い信仰と新しいエートスとがお互いにせめぎあう大きな過渡期を形作っていたと考えるからである。もちろん、ピーター・バークが指摘するように、宗教的世界を含めたヨーロッパ全体の民衆文化の変容は、プロテスタント地域と都市化の進んだ地域では一七世紀後半までに起こっており、[4] イギリスの宗教状況の変化に対するトーマスの記述もこれと軌を一にしている。しかし、知識人や啓蒙的な聖職者たちによる民衆文化への攻撃が、実際に民衆自身のもとにまで届き、彼ら自身がその内側から自分たちの文化を変化させていくのにはかなりの時間を必要としており、その意味で一八世紀は、前世

紀の後半頃までに起こっていた「民衆文化の改革」の波が、着実に民衆の中に押し寄せる途上にある時期だったと考えられる。

さて、この過程は、新旧の信仰のせめぎあいと見なすことができるとともに、別の視点からは二つの世界への分裂ともとらえることができる。バークは、民衆文化に一七世紀後半までに起こった変化の過程を、上層階級や知識人の民衆文化からの「撤退」と特徴づけているが、一八世紀におけるこの撤退の進展は、上層階級が代表する「大伝統」と民衆自身の住む「小伝統」との「裂け目」がさらに大きくなったことを意味していた。[5] つまり、宗教的領域に即していえば、一八世紀は制度的宗教（大伝統）と民衆的宗教（小伝統）との間にますます大きな溝が生じ、この領域が両世界へと引き裂かれるという、筆者のいう宗教的領域におけるある種の二重構造が過渡的に形成されていたと想定できるわけである。[6] つまり、上層階級や知識人の「撤退」によって、彼らと一般民衆とが単一の宗教的リアリティを共有することがますます困難になり、新しいエートスを身につけた人々の世界と伝統的な信仰の圏内に留まっている人々の世界に、宗教的リアリティが分裂するようになったのである。もちろん、この二つの世界への分裂は境界のはっきりとした固定的なものではなく、それらは互いに一つのまったく完結した世界であったわけでもない。また一九世紀に入って、民衆を取りまく社会環境の変化や彼ら自身の宗教的覚醒などによって、両世界の関係は再び緊密になり、「小伝統」は急速に「大伝統」の世界へと編入されることになる。しかし、少なくとも一八世紀においては、魔女や妖精などの古い信仰と啓蒙的で科学的な思考とが、それぞれ担い手を異にして並存するという二重構造的状況が存在していたと考えていいように思うのである。

本稿で扱うことになるメソディズムの創設者ジョン・ウェスレーは、まさにかかる宗教状況の中でその精力的な活動を展開した人物である。彼の八七年に及ぶ生涯は、一七世紀の最後の時期から一八世紀をほぼまるごと含んでおり、その意味で、彼の活動や思想を語ることは、文字どおりこの時代の宗教史を語ることにつながる。しかし、これは、単に彼の生涯が一八世紀全般に及んでいたからという単純な理由からではなく、むしろ、彼の活動の特徴は、上述した当時の宗教状況を色濃く反映していたと考えられるからである。これは二つの意味をもっている。一つには、ウェスレーはかかる二重構造の目撃者であり、その直中に身を置いていたということである。いま一つは、彼の存在や活動は、この二つの世界を媒介するものだったということである。つまり、ウェスレーは制度的宗教世界と民衆的宗教世界という宗教的領域の分裂を目撃し、それらを架橋することに努めたのである。ここで問題となるのが、ウェスレーが両世界を「媒介」ないし「架橋」したということの意味であろう。この点については本論で述べるとして、ここでは、なぜ彼がこうした役割を担いえたのかということについて結論だけを述べることにする。一言でいえば、それは、ウェスレーが、意識するとしないに関わらず、両世界の境界領域に身を置いていたからである。つまり、オックスフォード大学のフェローだったウェスレーは、当時の支配層のエリート的大伝統に片足をしっかりと据えているものの、彼のもう一方の足は、後述するように、魔女や亡霊が徘徊する民衆的宗教世

界の大地を踏みしめていたのである。そして、彼の保持するかかる境界性が両世界を媒介し、それらを架橋することを可能にしたのである。ところが、ウェスレーのこの民衆的宗教世界と通底する側面は、これまであまり強調されてこなかったように思われる。むしろ、意識的に無視されて、反対に彼の思想がもっている啓蒙的で理性的な要素ばかりに焦点が当てられてきたような印象すら受ける。これは、少なくともウェスレーの運動をイギリスの宗教史の中で評価しようとする場合、問題なしとはいえないのである。とりわけ、一八世紀から一九世紀におけるコンウォールやヨークシャー地域へのメソディズムの浸透の問題や、スウェーデンボルグなどの異端的集団とこの運動との関連を考える場合に、民衆的宗教世界とウェスレーとの関わりを検討することは極めて重要だといえる。[7] 筆者は、本稿においてウェスレーと民衆的宗教世界との緊密な関係を明らかにするために、ウェスレー研究の領域ではほとんどこれまで論じられることがなかった『アルミニアン・マガジン』誌（以下『アルミニアン』と略す）を取り上げてみたいと考えている。とりわけ、その雑誌に掲載されていた多数の雑録の内容を紹介し、それらを詳しく分析することによって、ウェスレーや初期のメソディストたちの宗教的世界の一端を明らかにしたいと考えている。そして、最後に、これらの分析を踏まえて、一八世紀のイギリス宗教史においてウェスレーやメソディズムが担っていた役割の一端を考える糸口を示唆したいと思っている。

二、『アルミニア・マガジン』とその雑録

ウェスレーが一七七八年に創刊したこの雑誌については、これまでほとんど研究されてこなかった。筆者の知る限りでは、一九二〇年にA・W・ハリソンが「ウェスレー歴史協会」の紀要に書いた短い論文と、それからほぼ四〇年ほど経った一九六九年に同じくその紀要に掲載されたF・カンバーズの小論がある程度で、この雑誌の本格的な研究は皆無といってよい。[8] しかし、この雑誌は、ウェスレーや初期のメソディズムの宗教世界を知る上で極めて貴重な資料を提供しているように思われる。もちろん、それは多くの歴史的変遷をたどっており、『アルミニアン・マガジン』という名称はもとより内容についても大きな変更が加えられている。雑誌名については、創刊から二〇年後の一七九八年に『メソディスト・マガジン』に、さらに一八二二年には『ウェスレアン・メソディスト・マガジン』へと変更（最終的には『メソディスト・マガジン』に復帰）がおこなわれており、内容面でもウェスレーの死後まもなくして「キャプテン・ブライの航海」と題された旅行記が連載されるなど新しい要素が加わる一方で、創刊号から掲載されていた詩歌や後に詳しく述べる種々の奇談が次第に姿を消している。全体としてみれば、年を経るごとに洗練された雑誌へと変貌していったことがわかる。

まず、ウェスレーがこの雑誌を創刊した意図を簡単に紹介することで、この雑誌の性格を考えてみることから始めよう。彼は、創刊号の巻頭言で、カルヴィニズムの予定説を弁護する『スピリチャル・マガジン』、『ゴスペル・マガジン』という二つの雑誌が相次いで刊

行されたことに言及して、自らの雑誌はこれらカルヴィニズムとはまったく異なった立場、つまりアルミニウス主義に立脚し、それを擁護するためのものであることを宣言している。[9]『アルミニアン・マガジン』という雑誌の名称も、カルヴィニズムとの対抗を意識していたことは論を待たない。つまり、この雑誌は、当時激化しつつあったカルヴィニストたちとの論争の「武器」という一面をもっていたわけである。しかし同時に、その雑誌の読者は、神学者たちよりも一般のメソディストたちを予想しており、彼らに対する信仰指導書という性格も色濃く備えていたことも忘れてはならない。この雑誌の内容の大半は、アルミニウスを始めとする聖人の伝記の抜粋やウェスレーの書簡や論文（これらはほとんどウェスレーの著作集に再録されている）であり、それらがメソディストたちの信仰や生活の模範的モデルや指導原理となったことは明らかである。その点で、この雑誌は組織の信仰上の機関誌という性格を含わせもっていた。『アルミニアン』の発行部数についてははっきりとしたことはわからないが、その販売を担当したのは説教者たちであり、その収入が組織の出版部門を通じて彼らの年金などの重要な財源となったため、積極的な販売努力もおこなわれ、かなり売れたといわれている。[10]

雑誌としてみれば全体としてあまりおもしろいとはいえない『アルミニアン』を少し丹念に読んでみると、ウェスレーの重厚な神学論文や書簡などの中心的な記事の影に隠れて、彼自身が収集したり執筆した思われる興味深い様々な雑録が目にとまる。それは、一つのテーマに従って書かれたものではもちろんなく、一つ一つの記事の分量もそれほど多くない。しかし、そこには神学的な言語ではすくい上げられないもう一つの宗教的世界が存在している。それは、ウェスレーや初期のメソディストたちが抱えていた当時の民衆的宗教世界に通低する要素である。この点について、ヘンリー・ラックは次のような示唆に富む指摘をしている。「これ［この雑誌の雑録］をウェスレーの教説と宣教にとって周辺的であるとして退けることは誤りである。それはまったく彼の一般的な態度と一致している……それは同時にウェスレーと彼の信者たちの精神的世界を明らかにしている」。[11]ここでラックは、ウェスレーの神学や説教の理解だけに傾きがちな従来のウェスレー研究を鋭く批判して、これまでの研究で些細なものとしてほとんど無視されてきた『アルミニアン』の雑録も、ウェスレーや初期のメソディストたちの宗教的世界を理解する上で十分に検討に価する資料であることを指摘しているわけである。

さて、ウェスレーが亡くなる前年の一七九一年までの初期の『アルミニアン』に限定して、こうした雑録を分類してみると大きく次の四つに分けられるように思う。（一）魔術（witchcraft）にまつわる逸話、（二）亡霊出現にまつわる逸話、（三）種々の奇談と癒し、（四）病気の治療法、である。もちろん、これら以外にも、号によってはいろいろな種類の雑録が掲載されており、上述したものだけがこの雑誌の雑録というわけではない。その中にも興味深い記事もある。例えば、「スウェーデンボルグ男爵に関する風説」と題された記事は、スウェーデンボルグの精神的錯乱を示す逸話を紹介しており、彼とウェスレーとの関係を考える上で示唆に富む内容を含んで

いる。[12] しかし、先に分類した四つの話題は内容を異にしながらも、主要な記事に混じって繰り返し掲載されており、その点で種々の雑論の中でも際立って目を引くものなのである。以下、それぞれについて具体的に紹介してみよう。

（一）魔術にまつわる逸話

(1)「魔術。ダンフリーズ・ウィークリー・ジャーナルより」[13]
(2)「スウェーデンのモラという村で発見された魔術の話」[14]
(3)「ジャクソン氏の魔術についての話」[15]
(4)「ヤーマスの魔女の話……」[16]

これらの話に共通な特徴を考えてみると次のようなことに気づく。一つにはそれがウェスレーの直接的な体験ないし見聞ではなく、いずれも魔女にまつわる顛末を記した記録の再録であるということと、いま一つはそれらがどれも一七世紀の比較的古い話であり、しかもイギリス国内の話に必ずしも限られていないということである。ウェスレーがなぜこうした話題に関心をもったのかはあらためて述べるとして、ここで興味深いのは魔女に対する彼の強い関心にも関わらず、既に一八世紀後半にはこうした出来事が歴史的な物語に過ぎなかったということである。つまり、端的にいえば、魔女の存在のリアリティが失われつつあったわけである。実際、イギリスでは一七三六年に魔術が犯罪であるとした法律が撤廃されており、魔術は社会的制度の上でもその基盤を完全に失っていた。こうした状況に対して、魔女や魔術の実在を具体的な証拠から実証すること、これがこの種の雑録を掲載したウェスレーの意図だと思われるが、その肝心な証拠がいずれも前世紀の記録であったことに、当時の宗教状況を窺うことができる。

（二）亡霊出現にまつわる逸話

(1)「バクスター氏の『亡霊出現と魔術に関する疑問の余地のない歴史から明らかされた精霊の世界の確実さ』からの抜粋」（バクスターのこの著作から亡霊譚など八つの話を抜粋されている）。[17]
(2)「不思議な話」[18]
(3)「亡霊出現による殺人の見事な発見という話」[19]
(4)「シドナム少佐の亡霊の話」[20]
(5)「亡霊出現によってもたらされた不思議な救出の話」[21]
(6)「テッドワースの鼓手の話」[22]
(7)「ジョージ・ヴィリャズ卿の亡霊について」[23]
(8)「義理の息子トーマス・ゴッダドへのエドワード・エイボンの亡霊出現」[24]
(9)「アイルランドのニューリイでの不思議な出来事」[25]
(10)「ある晩寝室に出現した亡霊に関するボーディジ博士の話……」[26]
(11)「亡霊出現に関する話……」[27]

これらの記事の数が多いとみるか少ないとみるかは意見の分かれるところかもしれないが、少なくとも『アルミニアン』がメソディスト派最初の公的機関誌だったことを考えれば、雑録とはいえ全く無視して済ませられない量だといえよう。また、ウェスレーはこの種の話を彼の『日誌』に、かなりのページを割いて書き記しており、[28] この点からも彼の関心の深さが窺われる。この雑録群の特徴は、（一）のものと同じように全体として一七世紀の半ば頃の話が多く、また、いろいろな書物からの抜粋が大半である。それでも、(2)、(5)、(9)の

記事はウェスレーと同時代の出来事を記録したものであり、特別な出典も明示されていないことから判断して、彼が直接聞き書きしたという可能性も考えられる。これらの記事がどのようなものであったのかを具体的に紹介するために、ここでは(9)の記事を訳出してみることにする。

「一、ディクソン家のフランシスとエリザベス姉妹（一人は四〇歳、もう一人は三〇歳）は、母親が亡くなってこのかた自分たちの小さな家で二人で暮らし、誠実で敬虔な人柄は変わることがなかった。一七七九年のイースターの数週間前から、彼女たちはいろいろなことで悩まされるようになり、その騒動は一七八五年、六月一七日の現在になっても昼夜を分かたず続いている。ある時は小犬が現われ家の中を走り回った。またある時は小さな男の頭が現われた。飼っていた犬はしばしばひどくおびえ、テーブルの高さまで飛び上がった。四週間苦しんだあげく、犬は横になりひどく膨らみ死んだ。

二、彼らの猫も同じようにおびえ、よく鳴いて目に見えなものとひどく争っているように見えた。猫はその見えないものによって何度もファニー［フランシスの愛称］・ディクソンの腕や顔に投げつけられ、彼女は猫にひどくひっかかれた。

三、たくさんの石が彼女たちに向かって絶えず飛んできて、その一つがファニーの頭に当たった。ほとんど気絶するほど強く当たり、その傷はすぐには直らなかった。

四、何度も毛糸や衣服が切られた。糸車も粉々にされることも多く、その一部が持ち去られ、そのため仕事ができなかった。同様に、昼夜の別なく家の周りのあらゆるものが投げつけられ、彼女たちは常に悩まされた。火が投げつけられることも多かったので、いつも家が火事になるのではと心配だった。実際、ある日など火の気がまったくないのに、ファニーのエプロンに火がつき、ようやくそれを脱ぐことができたときには大部分が焼けてしまった。見えない手が彼女の衣服を掴んで引き回し、彼女を押し倒すこともよくあった。

五、毎日、彼女たちは家の中を人間が歩き回る音を聞いた。同じように、顔先で息をしたり、あえいだり、鼻を鳴らす音を聞いた。戸口で猫がやるような鳴き声もよく聞いた。そして、一度に五、六回発射されるピストルの音を彼女たちの間近で何度も聞いた。

六、ほとんど毎晩、耳の側で、朝まで休まずに時計が大きな音でカチカチいうので、彼女たちは全く休めなかった。同時に、たんぽぽの頭のような小さなものが彼女たちの上をはいまわり、寝具の上にも下にも入った。これが彼女たちを咬み非常に苦しめた。ほぼ毎晩、だき犬ほどの大きさのものがベッドの天蓋から彼女たちの上に飛び込んでくるらしかった。そのために、彼女たちは体力も健康も損ね、蒼白で骸骨のように痩せた上に、生活の糧を稼ぐことができないためにひどく貧窮した。それでも、一つの不平ももらしていない。主にお任せいたします、と彼女たちはいまでも語っている」。[29]

ウェスレーがどのような意図で、この「ポルター・ガイスト」的現象と考えられる出来事を掲載したかははっきりしない。しかし、それを全面的に信じていなかったとしても、信じる気持ちが強かったとみていい。というのも、これと同じ種類の記事の中には彼自身の短いコメントが付けられているものがあり、[30]それらはいずれもこうした現象に対する世間一般の懐疑的態度を非難して、それらを肯

定的に受け取る方が自然だとしているからである。

（三）種々の奇談と癒し

ここでは次の三種類のテーマを扱った記事をひとつにまとめてみた。まず、既に紹介した魔術や亡霊譚と重なりながらもそれらとは少し異なると思われる、(A)夢の知らせなど主に夢をテーマした記事、(B)神への信仰による奇跡的治癒を報告した記事、そしてもう一つは、(C)人間の生理学的不思議さとでもいうべき話題を扱った様々な記事である。

(A)夢などをめぐる奇談

(1)「不思議な話」[31]

(2)「三度繰り返された夢によって阻止された殺人」[32]

(3)「驚くべき夢」[33]

(4)「驚くべき夢に関するホール主教の話」[34]

(B)奇跡的治癒

(1)「あるオランダ婦人の奇跡的治癒」[35]

(2)「奇跡的治癒」[36]

(3)「特別な治癒」[37]

(4)「突然の治癒」[38]

(5)「メアリー・メイラッドの治癒」[39]

(C)人間の生理をめぐる奇談

(1)「睡眠状態で歩いている紳士の驚くべき話」[40]

(2)「異常児の話」[41]

(3)「睡眠状態での歩行」[42]

(4)「尋常ならざる怪物」[43]

(5)「特別な状況」[44]

(6)「眠り続ける女性の不思議な話……」[45]

(7)「奇跡的に伸びた女性の髪の話」[46]

合計で一六になるこれらの記事の内容について少し検討してみると、(A)の話群の内容は意識を失って天使に出会い地獄と天国の辺りをさまよってきた男の「臨死体験」を書いている(1)を除いて、残りのものはどれも夢の知らせの正しさを扱っている。例えば(3)の記事では、ある紳士が父親の死ぬ夢を見て、それをノートに記しておいた。しばらくして、それを見てみるとその夢の日付は父親が死んだ日と符合していたというものだ。(B)の話群は表題からも明らかなように、長い間患っていた病が信仰によって癒されてしまったという体験談で、これまでの話の中では最もキリスト教信仰に直接的に関わる記事だといえる。逆に(C)の話群はこれまでの記事と比較して最も異質な内容を扱っている。このうち、(1)、(3)はいずれも夢遊病と思われる人々の奇妙な行動を詳しく記録したものであり、(2)はある医者の報告書を抜粋したもので、ある少年が並外れた速さで成長を遂げ、その結果わずか七歳で老衰によって死亡したという話である。(6)は文字どおり髪の毛がいっぺんに伸び始めて止まらなくなった女性の話であり、(7)はある女性が六週間も眠り続け、いったん覚醒するが、また三週間、四週間と眠り続けるという奇談である。これらの解釈は後に述べることにして、最後の分類について簡単に見てみよう。

（四）病気の治療法

(1)「胸の腫れ物の治療」[47]

(2)「しびれのための手当」[48]
(3)「ひどい捻挫を治すための方法」[49]
(4)「ひ素ないし毒蛇に咬まれた場合の治療」[50]
(5)「狂犬に咬まれた場合の治療」[51]

これらの内容は表題を見れば明らかだが、それぞれがごく短いものなので、どんなものだったのかを具体的に紹介するために(5)についていただけ訳出してみよう。

「狂犬に咬まれた場合、乾いた塩が当座の治療法である。それをかなり長い間［傷口に］つけておいて、湿ってきたら可能なかぎり何度も新しく取り替えるようにする」。[52]

これらは、信者たちが日常生活で遭遇する種々の病気の治療に関する情報のサービスであり、このあたりにもメソディストたちの生活の指導書という『アルミニアン』の性格を窺うことができる。また、そこにはウェスレー自身の医療への強い関心も介在していたはずである。彼がイギリス各地の民間医療を収集して出版した『素朴な医学』（*Primitive Physic*）には三〇〇ほどの病気に対する治療法が八〇〇以上収録されており、その関心の深さを窺わせる。なお、『素朴な医学』の中には狂犬に咬まれた際の別の治療法が五つほど紹介されており、その末尾には「すぐに誠実な医者に相談すること」と書いてあることも、ウェスレーの名誉のためにつけ加えておこう。[53]

三、雑録群の解釈に向けて

(1)「人間の生理をめぐる奇談」の雑録群

さて、次にこれらの記事をどのように解釈すべきかという問題に目を向けてみよう。このうち（四）の「病気の治療法」の意味については既に簡単に触れたので、ここでは残りの三つのものについて考えてみたい。このうち、（一）「魔術にまつわる逸話」と（二）「亡霊出現にまつわる逸話」の雑録群は重なるところが多いので一緒に後で論じるとして、まず、（三）の「種々の奇談と癒し」について手短に言及することにする。とはいえ、この雑録群そのものが内容的に異なった記事を集めたものなので、一括して論ずることは難しい。そこで、この中で最も異質だと思われる（三）(C)の「人間の生理をめぐる奇談」についてだけ触れてみよう。これらは、夢遊病患者の行動や覚醒しない女性の話など、実に奇妙な話が報告されているわけだが、それらが人間の睡眠などの生理現象の異常を扱っていることから、これを既に論じたウェスレーの医療に対する強い関心と関連させて理解することも可能かと思われる。

しかし、さしあたり、筆者はこれらの記事をウェスレーの奇怪なもの、奇妙なものへの飽くなき好奇心の現われと解したい。亡霊やポルター・ガイスト現象への強い関心も、一面では彼のかかる好奇心の現われとも見ることができ、この他にも『アルミニアン』には奇妙な昆虫の話や奇怪な形状の「怪物」の報告など、自然界から超自然界に至る実に多くの異常な出来事が報告されている。しかし、この好奇心ないし嗜好をウェスレーの個人的資質としてだけ見るのでは不十分であるように思われる。確かに後に述べるように、そこに彼の個人的資質が大きく介在していたことは論を待たないが、同時に、彼を取り囲んでいた当時のイギリスの社会風潮の影響にも目

を向ける必要がある。一八世紀末から一九世紀の初頭にかけてのイギリスには、こぞって奇怪なもの、異常なものの発見に血道をあげるという風潮が蔓延していたからである。[54] なかでも「兎を生んだ女性」の話は、ウェスレーが紹介した「眠り続ける女性の話」などとともに、多くの人々の耳目を引いた出来事だった。[55] クラーク・ギャレットは、当時の著名な著述家ロバート・サウジーを引き合いに出しながら、その状況を次のように書いている。

「彼［サウジー］は、ロンドンのテームズ川の南にあるセント・ジョージズ・フィールドで、アメリカ・インディアンだと称する、顔をペンキで塗り髪に羽をつけた女性を（六ペンスで）見物した。また『驚くべき大きな子供』－実は鈍愚な四歳児－も見ていた。状況は地方ではさらに悪かった。ある友人は、そこで『妖精と称した体毛を剃られた猿』と、チェックのチョッキとズボンを着て、肘掛け椅子に座っている体毛を剃られた熊を見た。その持ち主は、その熊はエチオピアの野蛮人であると公言した」。[56]

この異常なものへの嗜好を膨張させたものこそ、当時の出版産業の全国的ネットワークの形成とそれを基盤とした情報の全国的流通だった。[57] これによって、地域的な愚にもつかない話が都市社会に生きる人々の好奇心を刺激して、まことしやかなリアリティを獲得して一人歩きするという状況が生じていたのである。[58] また、そこから奇抜な風体や様子を装って世間の注目を引いて全国的に有名になり、それでひと儲けしようと企む人々が出てきても不思議はなかった。こうした時代状況の中で、ウェスレーの好奇心が刺激され、さらに膨らんでいったことは想像に難くない。少なくとも、『アルミニアン』にこれに類する記事が数多く掲載されたことは、彼の周りにこの種の情報がかなり流布していたことの証左であり、彼自身が様々な奇談を抜粋して、それを自分の雑誌に転載していたことは、ウェスレーもこうした時代風潮の直中にいたことを物語っている。その意味で、この雑録群は、彼の好奇心を媒介としながらも、当時のイギリスの世情の縮図であったともいえるわけである。

(2)「魔術にまつわる逸話」と「亡霊出現にまつわる逸話」の雑録群

さて、次にもう一つの雑録群に目を転じてみよう。魔術や亡霊といった類のものに対するウェスレーの関心については、従来のウェスレーの研究書も程度の差こそあれ言及している。それらは、一般に彼の被っていた時代的制約や「軽信性」を物語るエピソードとして簡単に触れられることが多いが、それをもっと積極的に解釈しようとすれば、彼の『日誌』の次のような一節が思い起こされるだろう。

「同様に確かに、イギリス人一般、そして実にヨーロッパの知識人のほとんどは、単なる老婆のおとぎ話として魔女や亡霊の話いっさいを捨ててしまっている。私はそれを残念に思う。そして、私はこの機会を利用して、聖書を信じているたくさんの人々がそれを信じていない人々に払っているこの乱暴な敬意に謹んで抗議したい。……彼らは（キリスト教徒がそれを知っているかどうかは別として）魔術（witchcraft）を放棄することが結果的には聖書を放棄することだと良く知っている。もう一方で、人間と精霊たちとの交流の話が一つでも認められたならば、彼らの空中楼閣（理神論、無神論、唯物主義）が瓦解してしまうことも承知している。したがって、私

はこの武器がもぎ取られるのに甘んじる理由がわからない」。[59]

ここで彼は、自ら魔女や亡霊の存在を信じていると語るとともに、これらの実在への信仰は理神論や無神論への戦いの戦略的武器でもあると断言する。つまり、理神論者たちは人々が魔女を信じないようにすることで聖書の権威そのものを否定しようと目論んでおり、その戦略に乗らないためにもこうした存在を信じる必要があるというのである。こうなると、ウェスレーのこれらの話の収集も単なる好奇心からというのでは済まなくなる。それはキリスト教擁護の戦略であり、むしろ彼の思想の当然の帰結だということになってくる。

このように、前述の記事群をウェスレーの思想の中に位置づけて、その意味を考えることは可能であり、こう考えることで彼の魔女や亡霊に対する異常な興味を解釈することはできる。しかし、筆者はこうした解釈をとらない。というのも、この解釈の方法は、いずれもウェスレーのこの種の関心をそれ自体として問題にしておらず、それらを彼の聖書への信仰という誰にでも承認できる枠組へといったん還元して、その中に彼の関心を位置づけなおしているように思われるからである。それは、いわば、魔女などという近代的な知性からは怪しげに見える実在を、聖書の至上性という正当なプロテスタント的信条によっていったん脱臭してから、「なるほど」と納得する方法のように感じるからである。もちろん、こうした解釈は、既に述べたように、ウェスレー自身の書いた文章に十分な根拠をもっており、この解釈が誤っていると主張しているわけではない。ただ、筆者としては、この問題がそれ自体として一つの問題領域を形成していると考えており、それらを別の角度から把え直してみたいのである。その角度とは、彼の関心を初期のメソディストたちの宗教的世界、さらにその背後に想定される当時の民衆的宗教世界との連続性の中で位置づけて見るというものである。そして、こうすることによって、広く民衆的な宗教世界の一端が照射されるとともに、その中におけるウェスレーたちの位置を理解する糸口が開けるように思えるからである。

こうした視点からこの問題を考える場合、まず、彼自身の青年期の個人的体験を簡単に見ておかなければならないだろう。思春期に彼の実家で持ち上がったポルター・ガイスト現象に関わる騒動である。この事件の顛末については、彼自身が著した『私の父親の家での騒動に関する考察』（An Account of the Disturbances in my father's House）に詳しいが、[60] 要するに彼の生家であるエプワースの牧師館でいわゆる「ラッピング」と呼ばれる現象が起こったのである。ちょうどこの時、ウェスレーはチャーターハウス校で寄宿舎生活をしていて牧師館を離れており、この現象を体験していない。しかし、帰宅してから自分自身で独自に調査をおこなったことから明らかなように、この現象に非常に強い興味を示している。そして、一七二六年には、ウェスレー自身も牧師館で二度ほど異常な体験をしたという。[61] こうした出来事の彼の内面への影響について、ウェスレーの青年期の研究で優れた仕事を残しているV・H・H・グリーンは、次のように書いている。「重要なことは、チャーターハウスでの思春期の感受性の強い青年の心［ウェスレー］に亡霊出現が与えた影響である。それは、同じような現象に対する彼の興味を引き起こし、その生来の信じ易さを強め、見えない世界への関心を確か

なものにすることに役立った」[62]。明らかに、グリーンは、ウェスレーのこうした世界への関心の原点として牧師館でのポルターガイスト体験を考えており、思春期のかかる体験がその後の彼の関心を大きく左右していると見ている。リチャード・ハイゼンレーターも、「幽霊屋敷や魔女やその他の地方の民間伝承に対するウェスレーの魅了は、エプワースの奥地での彼の幼い頃の体験にしっかりと根ざしていた」として、グリーンと同様な見解を表明している[63]。このように、彼の思春期の霊的体験が、この種の出来事へのウェスレーの関心のあり方を大きく規定していたことは間違いないところだろう。

しかし、ウェスレーのこうした嗜好の背景に彼の個人的体験が介在している、とするだけでは不十分であるように思われる。問題は、それが彼の宗教的世界の中にどのような帰結をもたらしたのかということである。結論からいえば、思春期の体験は、彼自身が住んでいた制度的宗教世界から民衆的宗教世界への通路を穿つとともに、彼がそこに足を踏み入れる契機を与えたと考えてみたい。彼の思春期の体験やその後の民衆的宗教世界との遭遇は、ウェスレーがその世界と制度的宗教世界という異質な二つの世界を往還する際の「文化的落差」[64]を埋める役割を果たしたのである。彼は、それらによって、両世界の「文化的落差」に悩まされずに二つの世界を行き来することができたのである。

先の雑録群の世界が、民衆的宗教世界に直結していることは明らかである。魔女や亡霊にまつわる逸話が一七世紀までの民衆的世界で事欠かなかったのは、キース・トーマスの研究から十分に裏付けられるからである。トーマスはそこで実に様々なこの種の逸話を紹介しており、当時の一般民衆にとってこうした存在がごく身近なものとして観念されていたことがよくわかる。『アルミニアン』の逸話群は、これらの話と連続した世界を表現している。ところが、既に冒頭で指摘したように、一八世紀になると知識人たちはこうした世界から撤退するようになり、いわゆるトーマスのいう「呪術の衰退」が生じる。ウェスレーが先に引用した文章で嘆いてみせたのは、まさにこの現実だった。一七世紀の抜粋が雑録の中に多いことは既に指摘したが、これも一八世紀に生じた「呪術の衰退」という現実を反映している。しかし、こうした環境の中でさえも、なおウェスレーがこれらの逸話にこだわりえたのはなぜだろうか。端的にいえば、彼の身近にはなお民衆的宗教世界が豊かに存在していたからである。個人的体験を媒介にして彼が入り込んだその世界では、魔女も亡霊もリアリティを失っていなかった。それらは、あのアイルランドの姉妹が体験したポルター・ガイスト現象のように、彼らにとって依然として生きられた現実に他ならなかったのである。ウェスレーはこうした世界のリアリティの一部を共有しており、この世界に足場をおいて、そこから知識人たちの世界を見返すとき、彼にとって、魔術や亡霊を「老婆のおとぎ話」として一笑に付してしまう彼らの態度は痛烈な批判の対象になったのである。先の『日誌』の一節は、理神論攻撃への戦略であるとともに、彼自身が当時の民衆と共通の宗教的世界を生きていたことの証左でもあるのである。

ウェスレーを取り囲むこの民衆的宗教世界は、同時に当時のメソディストたちの宗教的世界とも密接に関わっていた。このことをもう少し具体的に明らかにするために、初期の彼らの宗教的世界の一

端を紹介してみよう。一八七〇年にジョセフ・バーカーが出版した自叙伝は、メソディストだった彼の両親の敬虔な信仰生活を描いた後で、次のように述べている。

「私の両親は他の迷信と並んで魔術と妖精の信者でもあった。彼らは、人間、特に特定の女性の中には、悪意や悪魔的影響力によって、人間と家畜を病気にしたり、その他の様々な点で人々を悩ましたり傷つけたりする力をもっている者がいると信じていた。私は、魔術によって友人のR・A・某のビールに起きた被害についての奇妙な話を父親が語ってくれたことを覚えている。……哀れなR・A・某は、魔術が自家製のビールの他にも被害を与えたと信じていた。同様に、ある女性のクラス・リーダー（メソディストの役職名ー筆者注）はかつて魔術をかけられたと思い、ある時など……魔術の話でその町の大部分を不安と混乱の中に投げ込んだ」。[65]

さらに、母親の妖精や精霊についての信仰をこう書いている。

「私の母親は妖精、ないしピクシーとデーヴォンシャーでは呼ばれているものを信じており、それは魔術への信仰と同じほど強かった。彼女は、姿は人間に似ていて、われわれの八分の一ないし十分の一の大きさの種族がこの世に生活して、人間界に干渉する、と信じていた。彼らは人々を害したり助けたり、金持ちにしたり貧乏にしたりする。子供たちをさらって他のものと入れ換えたり、特別な人々以外には目に見えないやり方で揺すったりする。彼女は自分自身ではその強力な小さな存在を見てはいなかったが、母親の知り合いの一人は、彼らが毎晩決まって家にやってきて、彼女の糸車で糸を紡いだことを彼女に語っていた。……私は、父親がそうしたものを信じていたかどうかはわからないが、彼が亡霊、ヨークシャーではボガードと呼ばれているものを信じていたことは知っている」。[66]

バーカー自身はメソディストの説教者から出発していろいろな人生遍歴を重ねて、一時はキリスト教を捨てて世俗主義的な運動に身を投じた人物であるので、この文章からは自分の両親の「迷信深さ」に対して苦笑を伴った距離が感じられる。しかし、それでも彼の発言は、当時の一般のメソディストたちの宗教的世界の貴重な証言の一つである。この文章を読む限りでは、彼の両親にとって、メソディストの信仰と魔女や妖精の信仰とは矛盾なく両立していたことがわかる。

魔女や妖精だけでなく、雑録の(三)の(A)で紹介した夢やヴィジョンにかかわる話も、初期のメソディストたちの伝記の中にしばしば姿を現わす。あるメソディストの女性の体験を説教者ジョン・ネルソンは次のように記している。

「S・Hはある種のトランス状態に入り、意識が戻ってきた時に、私は天国と地獄の両方にいたと夫に語った。彼女によれば、後者にいた時、そこにこの世で知っている人々が数人いたという。彼女がそこを出る際に、彼女が知っているある人（その時彼女はその名前を挙げた）が頭と足を丸めてふるえているのが見えたという。意識が戻るとすぐに、夫を遣って彼が死んでいるかどうかを確認してみた。彼が家族に尋ねると、寝る際に非常に元気よく見えたので、彼の死など全く考えていなかった。しかし、様子を見に行くと、彼らは、彼女が以前に見たように、彼が頭と足を丸めて死んでいるのを発見した」。[67]

これらの記述から窺うことができる彼らの宗教的世界は、明らかに民衆的宗教世界と連続しており、同時に『アルミニアン』の雑録群が表現している世界とも同質なのである。両者は、ともに魔術や亡霊など、同じ宗教的世界で活躍する宗教的表象の実在を語っており、雑録群の情報源の一つが初期のメソディストたちであったことを予想させる。したがって、雑録群に示されるウェスレーの宗教的世界の一端は、彼を取り囲む初期のメソディストたちやさらにその背後にある民衆的な宗教世界へと連なっている。彼の魔女や亡霊への好奇心は、こうした人々の豊かな宗教性を地盤として、そこからその正当性と自明性を汲み上げていたと思われるのである。[68]

四、結び

筆者は、本稿において、『アルミニアン』の雑録群を紹介し、それらの解釈を試みた。そして、それを通じてウェスレーや初期のメソディストたちの宗教的世界の一端を明らかにし、それらと民衆的宗教世界との連続性を指摘した。そこに現れた彼らの世界には、一八世紀に次第にリアリティを失いつつあった民衆的な宗教表象が息づいていたのである。しかし、反面、ウェスレーの生きる世界は微妙な二重性を抱えていたことも確かである。彼は民衆的宗教世界のリアリティを共有しながらも、その実在を知的に論証しようともしていた。バーカーの両親にとって、魔術による被害は生きた体験であり、かかるものとして魔術の実在は自明だった。これに対して、ウェスレーにとってその世界は、ほぼ第三者が話したり書いたりした記録の中にあり、それを通じてその世界の実在の確信は深められたのである。つまり、この点で、彼のもう一方の足は、明らかに文字が支配している「大伝統」の世界にあったのである。彼の宗教的世界は、民衆的宗教世界に通底しながらも、それと完全に一つになってはいない。これが彼の世界の二重性である。そのため、筆者が本稿で明らかにしたのとは全く反対に、「大伝統」の世界に属しているウェスレーに注目して、B・セメルのように、彼のアルミニアン神学の特徴から、メソディズムを合理的で近代的な性格を備えた宗教運動として解釈することも可能なのである。[69] 筆者も、ウェスレーのこの側面を十分に承知している。しかし、既に本稿で詳述したように、ウェスレーの複雑な宗教的世界をセメルのような視点からだけでは理解できない。明らかに、民衆的宗教世界との連続性もまた、ウェスレーの世界の重要な構成要素なのである。とりわけ、一八世紀から一九世紀のイギリスの宗教史におけるメソディズムの位置を考える場合には、かかる連続性こそ注目すべきだと思われる。したがって、最後に、少し視野を広げて、『アルミニアン』の雑録群から明らかにされたウェスレーや初期のメソディストたちが保持していた民衆宗教的要素が、この時代のイギリスの宗教史にいかなる意味をもっていたのかを簡単に展望することで本稿を閉じたいと思う。

既に冒頭で述べたように、この時期において民衆的世界で親しまれていた魔女や亡霊は次第に忘れ去られ、リアリティを失いつつあった。つまり、その世界は大きな変化を余儀なくされたのである。この変動が、トーマスが指摘するように、農村的社会の解体などの社会的変動を背景とした科学的世界観の浸透などによって生じたこ

とは論を待たない。しかし、その過程はどの領域でも一様であったわけではなく、また、それらが瞬時に生じたわけでもない。それらは、まず知識人などの「大伝統」の世界で起こり、次第に隣接する領域へと波及していったと考えられる。この過程において注目すべきは、この変化を「小伝統」へと伝達する媒介者の存在であろう。つまり、「大伝統」における変化は、両伝統に接する領域に媒介されることで始めて、「小伝統」の中へと持ち込まれるのである。そして、さらに、その世界の内側からそれらの変化に共鳴する人々を見出すわけである。宗教的領域に即していえば、その変化は、両伝統に属する媒介者によって伝達され、それによって民衆的世界の内側から、古い信仰と決別したりそれを新たな枠組で再解釈する人々を生み出したといえよう。ウェスレーが民衆的宗教世界と交流しえたという事実は、彼や初期のメソディストたちがこうした過程を媒介したり、それを直接的に担っていたことを十分に予想させる。例えば、バーカーの両親に見られたメソディストの信仰と魔女や妖精の信仰の共存は、ウェスレーのキリスト教が民衆的宗教世界へと到達し、そこで両者の邂逅が生じたことを物語っている。しかも、バーカーの次のような言葉は、彼の両親にとって、古い信仰と新しい信仰とがどのように共存していたのかを明らかにしている。「それでも、彼らの神への信仰が、魔女や妖精への信仰を超越していた。確かに、彼らは自分たちの子供の頃の迷信にこだわるほど愚かではあったが、その宗教的信仰こそ、一般的にいって、彼らの生活を律する大原則だった」[70]。このように、このメソディストの宗教世界には、古い民衆的信仰の存在とともに、それに代わってメソディズムという新しい信仰が次第に彼らの行動原理となっていく過程を読みとることができるのである。このことは、決してバーカーの両親だけに生じた個人的な出来事ではない。特に、それは、ウェスレーの運動が民衆的宗教世界の色濃く残っている地域に進出した場合に起こっている。この点についてここで詳述することは控えるが、コンウォール地方へのメソディズムの浸透を分析したJ・ルールは、この地方にメソディズムが受容せれた大きな原因として、この地域の民衆的信仰の根強さを強調するとともに、それらとメソディズムの信仰との親和性を指摘して、「民間信仰がメソディズムに代替したのではなく、それらがある宗教的語彙に翻訳された」と論じている[71]。彼のこの見解も、ウェスレーの信仰を受容した地元の説教者を媒介にして、民衆的信仰の担い手たちが新しい信仰に回心することによって生じた従来の宗教的世界の変容という事態を表現したものと理解することができよう。キリスト教が「民間信仰」を否定するのではなく、例えば、悪い精霊と良い精霊との葛藤が神と悪魔の対立として翻訳されるように、民衆的宗教世界を熟知している地元のメソディズムの説教者によって、その世界が簡単なキリスト教の枠組で解釈されなおしたのである。両者の親和性ないし連続性は、古い信仰世界の温存であると共に、その信仰の内的な変容でもある。妖精や魔術などの民衆的宗教世界の宗教的表象が必ずしも直ちに否定されずに、それらが制度的なキリスト教の言葉の中で再解釈されて一定の場所を与えられるとき、「小伝統」の世界は「大伝統」たる制度的宗教と結びつけられて、結果として、その内部から大きな変更を余儀なくされたのである。そして、こうした翻訳ないし包摂の

過程の中で、これまでの雑多な民衆的宗教世界は、取捨選択されながら制度的なキリスト教世界へと取り込まれ、次第に変貌をとげてゆくのである。民衆的宗教世界と制度的宗教世界を架橋するウェスレーや初期メソディストたちの登場によって、この時期のイギリス宗教史は新しい再編の道を歩むことになったのである。

[註]

(1) Keith Thomas, *Religion and the Decline of Magic* (Middlesex: Peguin Books, 1980, rep.). 荒木正純訳『宗教と魔術の衰退』(法政大学出版局、一九九三年)。

(2) この問題のもっとも優れた調査報告として次の著作が有益である。David Clark, *Between Pulpit and Pew* (Cambridge: Cambridge University Press, 1982). ただし、現代のイギリスの若者の間に見られるオカルティズムの流行にまでその視野に含めれば、「古い」信仰の衰退ないし残存というトーマスのやや進化論的な見方は慎重に取り扱う必要がでてくる。

(3) ジョン・ウォルフィーは、一九世紀の民衆的宗教を前世紀のそれと区別して、「拡散したキリスト教に基づく非公式的宗教」と呼んでいる。John Wolfee, *God and Greater Britain* (London & New York: Routledge, 1994), p. 93.

(4) Peter Burke, *Popular Culture in Early Modern Europe* (Hampshire: Wildwood House, 1988, rep.), p. 235. 中村賢二郎他訳『ヨーロッパの民衆文化』(人文書院、一九八八年)、三〇八頁。

(5) Ibid., p. 243. 邦訳、三一八頁。

(6) 山中弘『イギリス・メソディズム研究』(ヨルダン社、一九九二年)、一五～六頁。

(7) 山中弘「イギリス北部におけるスウェーデンボルグ主義の展開」『宗教研究』二九九号、一九九四年、一五一～三頁。

(8) A. W. Harrison, "The Arminian Magazine", *Proceedings of the Wesleyan Historical Society*, vol. 12, 1920. Frank Cumbers, "The Methodist Magazine", Ibid., vol. 38, 1969.

(9) John Wesley, "To the Reader", The Arminian Magazine, vol.1, pp. iii-iv. (以下、この雑誌はA. M.と略す)。

(10) Louis Billington, "The Religious Periodical and Newspaper Press 1770-1870" in Michael Harris and Alan Lee (ed.) *The Press in English Society* (London & Toronto: Associated University Press, 1986), p. 115-6.

(11) Henry Rack, *Reasonable Enthusiast* (London: Epworth Press, 1989), p. 350.

(12) "An Account of Baron Swedenborg", *A. M.*, vol. 4, pp. 46-9.

(13) "Witchcraft. From the Dumfries Weekly Journal", *A. M.*, vol. 6, 1783, pp. 100-102, 153-156.

(14) "A Relation of Witchcraft discovered in the village of Mohra in Sweden", *A. M.*, vol. 8, 1785, pp. 318-321, 375-8.

(15) "Some Account of Mr. Jackson's Witchcraft", *A. M.*, vol. 9, 1786, pp. 263-5.

(16) "A Relation of a Yarmouth Witch...was Executed, 1644: extraced from Lord Chief Justice Hale's Collection of Matters of

Facts", *A. M.*, vol. 10, 1787, pp. 368-9.

(17) "An Extract from Mr. Baxter's *Certainty of the World of Spirits: fully evinced by unquestionable Histories of Apparitions and Witchcrafts...*", *A. M.*, vol. 6, 1783, pp. 212-4, 267-8, 268-9, 324-6, 377-9, 435-7, 494-5, 547-9, 606-7, 667-9.

(18) "A Strange Account", *A. M.*, vol. 7, 1784, pp. 160-2.

(19) "A Relation of a wonderful Discovery of Murder, by an Apparition", *A. M.*, vol. 8, 1785, pp. 32-3.

(20) "An Account of the Apparition of Major Sydenham", ibid., pp. 93-5.

(21) "An Account of a strange Deliverance, occasioned by an Apparition", ibid., pp. 649-650.

(22) "An Account of the Drummer of Tedworth", ibid., pp. 155-7, 202-6, 250-4.

(23) "Of the Apparition of Sir George Villiers", *A. M.*, vol. 9, 1786, pp. 332-3.

(24) "The Apparition of Edward Avon, to his Son-in-law, Thomas Goddard", ibid., pp. 384-6.

(25) "Strange Occurrences at Newry in Ireland", ibid., pp. 660-2.

(26) "Dr. Pordage Account of Several Apparitions made one night to him in his bedchamber...", *A. M.*, vol. 10, 1787, pp. 254-5, 315-6.

(27) "An Account of an Apparition: extracted from Beamont's Treatise on Spirits", ibid., pp. 428-9.

(28) 特に、一七六八年の五月二二日の箇所を参照。Nehemiah Curnock (ed.), *Journal of the Rev. John Wesley* (London: Epworth Press, 1932), vol. 5, pp. 267-275. (以下、*Journal* と略す)。

(29) *A. M.*, vol. 9, pp. 660-662.

(30) 例えば、(8)の話の末尾でウェスレーはこう書いている。「たとえ天使や霊（今日の多くの良きキリスト者はそれを疑わしいとしている）の出現のようなことがあったとしても、彼らはこの種の事柄は現在ではすべて終わっていると確信している。そうした人々が聖書を信じるふりをしているのは全く驚くべきことではないだろうか。」。*A. M.*, vol. 9, pp. 386.

(31) "A Strange Account", *A. M.*, vol. 7, 1784, pp. 160-2.

(32) "Murder prevented by a Three-fold Dream", *A. M.*, vol. 10, 1787, p. 37.

(33) "A Remarkable Dream", ibid., p. 38.

(34) "Bishop Hall's Account of a remarkable Dream", ibid., p. 97.

(35) "The Miraculous Cure of a Dutch Woman", *A. M.*, vol. 9, 1786, p. 43-4.

(36) "A Miraculous Cure", *A. M.*, vol. 10, 1787, pp. 35-6.

(37) "An Extraordinary Cure", ibid., pp. 36-7.

(38) "A Sudden Cure", *A. M.*, vol. 14, 1791, pp. 468-9.

(39) "the Cure of Mary Maillard", ibid., p. 532-8.

(40) "A Remarkable Story of a Gentleman walking in his Sleep, *A. M.*, vol. 8, 1785, pp. 414-6.

(41) "An Account of an Extraordinary Child", *A. M.*, vol. 9, 1786,

p. 37.

(42) "Walking in Sleep", ibid., pp. 383-4.

(43) "An Uncommon Monster", *A. M.*, vol. 10, 1787, pp. 97-8.

(44) "An Extraordinary Circumstance", *A. M.*, vol. 12, 1789, p. 160.

(45) "A Strange Account of a Sleeping Women...", *A. M.*, vol. 13, 1790, pp. 138-140.

(46) "An Account of the Miraculous Growth of a Woman's Hair", *A. M.*, vol. 14, 1791, pp. 584-6.

(47) "A Cure for the Cancer in the Breast", *A. M.*, vol. 7, 1784, p. 555.

(48) "A Remedy for the Palsy", *A. M.*, vol. 8, 1785, p. 327.

(49) "Method of curing a violent Sprain", ibid., p. 327-8.

(50) "A certain Cure for Arsenic, or the Bite of a Viper", *A.M.*, vol. 10, 1797, p. 329.

(51) "A Cure for the Bite of a Mad Dog, *A. M.*, vol. 11, 1788, p. 496.

(52) Ibid.

(53) John Wesley, *Primitive Physic* (London, 1792), pp. 75.

(54) Clarke Garrett, *Respectable Folly* (Baltimore & London: The Johns Hopkins University, 1975), p. 147.

(55) 特に、兎を生んだ女性の話は、ホイットフィールドやウェスレーを風刺したといわれるホガースの『軽信、迷信と熱狂主義』と題された有名な版画の中でも画面の下の部分に描かれている。Hogarth The Complete Engravings (London: Alpine Fine Arts Collections Ltd., n.d.) No.252.

(56) Garrett, op. cit., p. 146.

(57) ジョン・フェザー（箕輪成男訳）『イギリス出版史』（玉川大学出版部、一九九一年）、一二五頁。

(58) Garrett, op. cit., pp. 148-151.

(59) *Journal*, vol.5, p. 265.

(60) *The Works of the Rev. John Wesley A.M.* (London: Wesleyan-Methodist Book-Room, 1831), vol. 13, pp. 501-7.

(61) V. H. H. Green, *The Young Mr. Wesley* (London: Edward Arnold Ltd., 1961), p. 106.

(62) Ibid., p. 59.

(63) Richard P. Heitzenrater, *The Elusive Mr. Wesley* (Nashville: Abington Press, 1984), vol. 1, p. 45.

(64) Ibid.

(65) Joseph Barker, *The Life of Joseph Barker* (London, 1870), pp. 19-20.

(66) Ibid., p. 22.

(67) John Nelson, in Rev. John Telford (ed.) *Wesley's Veterans Lives of Early Methodist Preachers Told by Themselves* (1767, fac.,) (Ohio: Schmul Publisher, n. d.) vol. 3, p. 189.

(68) ラックは、ウェスレーと並んで初期の説教者たちの権威の源泉として、当時の一般民衆が深く関わっていた呪術的な宗教世界を指摘している。Henry Rack, "Doctors, Demonds and Early Methodist Healing", in W. J. Sheils (ed.), *The Church and Heal-*

ing (London: Blackwell, 1982), pp. 151-2.

(69) B. Semmel, *The Methodist Revolution* (New York: Basic Books, 1977).

(70) Barker, op. cit., p. 22.

(71) John Rule, "Methodism, Popular Beliefs and Village Culture in Cornwall, 1800-50", R. D. Storch (ed.), *Popular Culture and Custom in Nineteenth-Century England* (London & Canberra, 1982), p. 62.

(やまなか・ひろし　愛知学院大学文学部助教授)